

毛利秀就自筆書状（馬來家文書3）

殿様が「手習い」をはじめめる

《初代萩藩主毛利秀就》

文禄4年(1595)に生まれた毛利秀就は、父輝元にとって、いや毛利家にとって待望久しい男の子でした。

慶長5年(1600)関ヶ原戦のあと、毛利氏は、周知のとおり防長2か国に減封となりました。輝元は隠居して「宗瑞」を名乗り、家督は幼い秀就が継ぎました。秀就に政治ができるわけもなく、実質的には、父親が藩政をリードしました。

翌年(慶長6年)、秀就は「証人」(人質)として江戸に在住することになりました。数えで7歳。現代なら幼稚園の年長さんにあたります。親としては心配でしょうがなかったのではないのでしょうか。

幼年の殿様には、多くの家臣が随従しました。例えば、傅役となった国司元蔵や児玉景唯などの重臣のほか人数の詳細は明らかにしえないものの、かなりの数の家臣が随従したと考えられます。周辺の大人たちは見守り、気遣っていたと思われます。

なにはつに さくやこの花 冬ごもり 今をはるへと さやかに
 正月十三日 秀就(花押)
 まき

《毛利秀就の手習い》

当館には、毛利秀就が幼少期に書いた文書が残されています。そのうちのいくつかを紹介しましょう。

写真は、「難波津の歌」です。

難波津に 咲くやこの花 冬ごもり
 今は春べと 咲くやこの花

「古今和歌集」の仮名序には、「手習ふ人のはじめにもしける」とあり、古くから書道

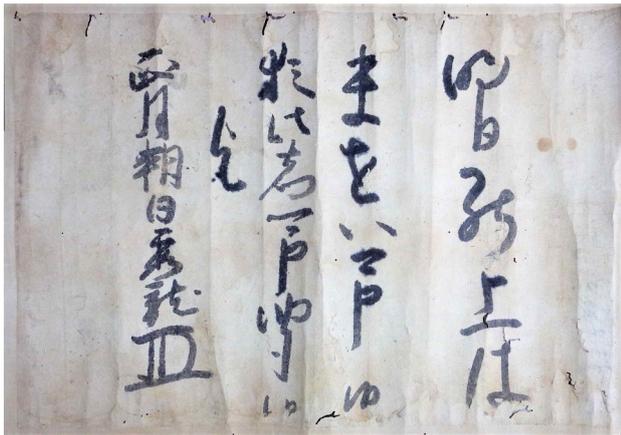


書庫内の諸家文書

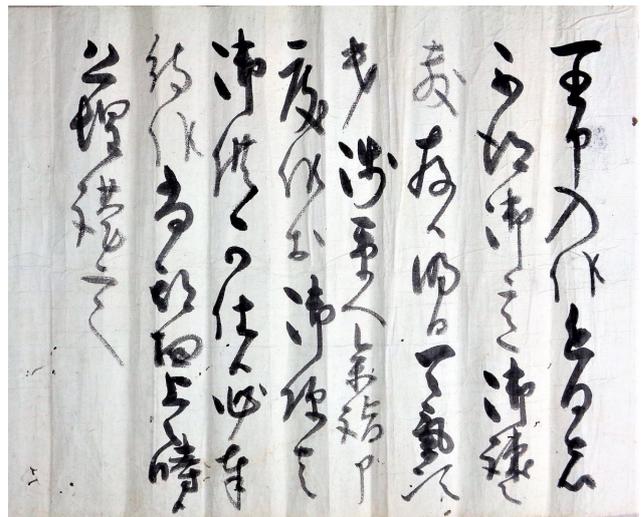
当館では、開館以来、毎年のように、県内外の個人の方々を中心として、それぞれのお宅に伝えられてきた古文書等を寄贈・寄託いただいています。多くの場合、その方のお名前を冠して「〇〇家文書」という名称で呼んでいます。

文書館での利活用によって、ご先祖の思いが未来へ繋がる。そうにお考えの方がたくさんいらっしゃるのだと思います。

因みに令和4年度までに474家分の諸家文書が寄贈・寄託されています。



毛利秀就自筆書状（出羽家文書9）



毛利秀就自筆書状（馬来家文書5）

明日罷上は
まをい可申候、
猶此者可申聞候、
かしく、
正月朔日秀就（花押）

一書申入候、近日者
不得御意、御疎々
敷存候、明日天氣次
第浅草へ参詣申
度候、於御隙者
御供可仕候、必奉
侍候、尚期面上之時候、
恐惶謹言、

の習い初めに用いられた和歌です。

お世辞にも上手とは言えませんが、年端も行かない幼子書いたとすれば、よく書けていると評価できると思います。さくやの「く」の字が抜けていますが、これは御愛嬌。「花」・「冬」・「今」、月日、実名は漢字で書いています。

手習いは学問の基礎であり、自筆で書状などを書くためにも必要で、日々取り組んでいたと思われます。写真を改めて見ると、手習いの成果に日付を書き入れ、その下に実名を記して「花押」を据える。単なる手習いに終わらせることなく、やがて藩主として書状や判物を発給する形式を身に付けてもらおうという家臣たちの心遣いが垣間見えますね。

宛所は「まき」（馬来）とあり、この文書は、大組馬来家に伝わったものです。当該の馬来家は、『萩藩閥閥録』巻106馬来惣左衛門家、「譜録」ま4馬来惣左衛門門征成家に当たります。江戸初期、同家には江戸詰めした形跡はなく、なぜ伝わったのか詳細については不明です。

2通目は、大組出羽家に伝わった秀就自筆書状、1通目と比べると、少しですが進歩の跡が見えます。漢字も増えて、署判についても上手になっていますね。ただ意味がよく分かりません。「はまをい」、「まをい」なのか。また宛所の

記載がありませんが、当時は親しい間柄ではそれを省略することはよくあることでした。

なお、この書状には裏書に「出羽孫平」とありますが、これは出羽家で書いたものと思われます。

3通目は、馬来家に伝わったものです。こちらは、月日・宛所に加えて署判もありませんが、現存する秀就自筆書状は、この独特の筆跡で書かれています。これを書いたときの年齢はわかりませんが、成長の跡が見えるかと思えます。書状の内容は、浅草参詣に誘ったものです。

藩主が発給する文書の大部分は、右筆が書いたものに花押を据えて完成しました。とはいえ、自筆で書状を認めることもあり、ここに「手習い」で培った成果が発揮されたわけです。